

---

# Ampere Blood

真中すペあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A m p e r e B l o o d

### 【NZコード】

N Z 8 8 0 1 Y

### 【作者名】

真中すすべあ

### 【あらすじ】

最新のVRMMORPGに入々は閉じ込められた。その世界で槍の男はひとりの少女を助ける。そして、ふたりの冒険が始まった。

ちりーん。

小さな鐘の音が響く。全体アナウンスを告げるその音は本来、サバーの不具合や停電後に予備電源に切り替わったときのために用意されたものだ。緊急でなければ使われない。

オープン テスト開始からちょうど十一時間が経過していた。  
強制的に半透明の四角い窓がプレイヤーたちの前に出現する。メル画面だ。

Sub : 【<sup>↙</sup>天地創造<sup>↘</sup>】案内】  
from : Noname

人の子よ 汝、試練を受けよ  
七日七夜を経て世界は創られた  
そして今より七日七夜の後、世界は生まれ変わる  
昼と夜を創ろう  
空と大地を創ろう  
太陽と月を創ろう  
魚と鳥を創ろう  
獣と家畜と、そして人を創ろう  
再び世界は生まれる  
万象が完成せしそき、更なる試練を与えよう

人の子よ 汝、神の敵を討ち滅ぼせ

機能 ログアウト が消失しました。

『Genesis World』はVRMMORPGだ。

VRMMORPGとは仮想現実多人数同時参加化型ロールプレイングゲームというなんとも長つたらしいものの略語であり、その省略される前の単語の羅列を囁まずに発音できる者は少ない。

その歴史は二十一世紀初頭のネットゲーム、いや、家庭用ゲーム機が普及したさらに数十年前から語るのが筋かもしれないが、ここはVRつまりは仮想現実を利用したゲームとしての始まりから説明させて貰おう。

今から十五年前に初めてゲームセンターに設置された。場所はあの自由の国だ。ものは米軍で使われた戦闘訓練用の本物。もちろん、もともとはゲームとして開発されたわけではない。それをひっきりなしに戦闘機の飛びかう基地の陽気な軍人たちが持ち前の自由さを發揮し、近くの子供に遊ばせるために持ち出した。

このあたりは非常に嘘くさいので情報の搅乱がなされている可能性がある。重要なことではないから気にする必要はない。

仮想現実、つまりはコンピュータによつて擬似的に精神を仮想の肉体に当てはめ仮想の世界への旅行ができるも、程度の認識で問題ない。

当時のそれは型落ちではあるが吐き気を催すくらい臨場感のある銃撃戦の楽しめるシロモノだった。日本でいう教育団体的なものか

ら批判を受けて撤去されるまで某国全土からゲーマーやらリリタリーマニアやらが集結して良い意味でも悪い意味でも賑わった。

その技術が日本の企業に渡るまで五ヶ月。ゲームセンターにマイルドになつたそれが置かれるまで三年。ファンタジーテイストに味付けされて家庭用として発売されたのが六年後の話。

第一世代VRMMOが発売されたのは七年前。携帯端末を含めたひとりあたりのネット接続可能なデバイスの所持率が2・0台を超えた日本という国にあっても予想より出遅れる形となつた。膨大な情報量を処理するサーバーが必要だったためだ。加えて、各社が競つて家庭用のマシンが開発するにあたると同時に規格の統一がなされたのも原因のひとつだつた。

第一世代VRMMOは飛びように売れた。やはり、ゲーム内でコミュニケーションが取れるというのは大きいのだろう。危惧された安全性の問題も大きなものはなく、全ては順調に進んでいた。ユーザーは加速度的に増加。

しかし、そこで満足しないのが人間だ。たとえばVRマシンにおいて視覚は秒間を六十のフレームに区切り、一コマ一コマをバラバラ漫画のように描き写すという手法を取つていた。

これはかつてのゲームやアニメーションなどと同じである。3Dのモデリングによる空間と事物を最先端のコンピュータで構成し、それをVRマシンへと転送することによってはじめて精神とデータが相互干渉を行う仮想世界が誕生する。

それを更に細かくしようといつ計画が持ち上がつたのだ。が、どんなものにも問題はつきものだ。

かつて、ロボット工学の分野で 不気味の谷 と呼ばれる問題があつた。

人間を模したロボットはあるところまで人間に近づけると不完全な動作や感情表現が人間に嫌悪感を与えてしまうというのだ。人間そのままの動きをなんとか「ピーしても無機物特有の不気味さを際立たせるだけだった。今でこそ解決しているが、当初は多くの研究者の頭を悩ませた。

仮想現実でもそれほど酷いものではないが同種の問題が起つていた。些細な違いが、ないと意識しているはずの差異があることが仮想現実酔いを引き起こす。

たとえば、視覚にしてもバーチャルリアリティでなければ気にならない程度の滑らかさだが、人間の認識は誤魔化し切れない。微妙な差異は返つて違和感を生む。

そこで、VRマシンをより完全なものにするために六十の枠を更に六十に分けることが決定された。ただし、これはモンスターとプレイヤーにのみ適応され、他の要素は全て従来の六十フレーム描写だ。

そして、他の五感も同じように強化、改善された。特に味覚は第一世代のVRゲームには存在しなかつたものだ。試運転の結果ではVR酔いも第一世代よりは少なくなつていた。

結果、ソフトの性能がハードを上回り、初期の家庭用VRマシンではプレイできなくなる。それが第一世代と第二世代の分水嶺となつた。

そして、彼ら の存在する『Genesis World』こそ 本邦初の第一世代VRMMORPGである。

クライに最初の任が下つたのはそれから五日後のことだった。

颯爽と漆黒の外套をなびかせ、風を切つて歩く。短く逆だつた黒髪は視界を妨げず、小さく揺れた。日本人としては平均よりわずかに高く設定された身長であるが、得物はそれよりもずっと長い。

やつと新しい武器と生活に慣れ、 ウオリアー のレベルも21になつていた。

ウオリアー は近接攻撃武器の攻撃力を上昇させ、スタミナ値の回復力を上げる。同じ近接職である ナイト や ブシード に比べ癖が少なく、ひとりでも狩りのしやすい職業だ。

彼はひたすら淡々と魔物を狩り続けていた。槍の基本スキルである 槍術 は成長率が最低ながらも熟練度GからEまで上がったのを始め、転職時に手に入れたスキルは着々と成長を続けている。

店には先客がいた。

白いマントに十字の切れ込みの入つたバケツ兜を抱えた大男だ。丁度工房から出てくるところでクライと鉢合わせになつた。堀の深い西洋人じみた顔立ちで金のオールバックと口髭は綺麗に整えてある。壯年の紳士をイメージしたデザインだ。

その手には巨体にふさわしい大きな鉄槌を軽々と持ち上げていた。彼の手首にはそのクラスを表すように十字架がぶら下がつていた。

「やあ、クライ。久しいね。仕事かい？」

名をヴァレンチノといい、鎧を得物とする不信心な プリーストだ。

「そうだ。あんたもか

「うむ、結果的にそうなった」

「なんだ。面倒事でも押し付けられたか？」

「そんなところだ。が、吾輩が来た一番の理由はこれの修理だ

軽く大槌を振つてみせた。光の粒が舞つた。光の精靈の加護を受けている証だ。序盤にしては質のいい金属でできている。攻撃力は高いが、その分重い。まともに扱うには筋力値がかなり必要になるだろう。どうやらヴァレンチノのレベルはクライより高いらしい。

プリーストの筋力値ボーナスは低い。そのくせ物理攻撃適性のある武器が重さを攻撃力とする鎧しかない。かつての聖職者がメイスを武器にしていたことからの引用だが、相性はいいとはいえない。

しかし、鍛えようと思つて鍛えれば重装備での運用も可能だ。素早い敵でも優れた技量を有する彼ならば容易に対処できる。更に高い魔法防御力と魔法による回復能力もあるためにそこらのナイトよりずっと優秀な守り手となるだろう。

「いい武器だな」

「だろう? ノイ殿はいつだって良い仕事をする。頼もしい限りさ

豪快に笑い、クライの肩を叩くと街中へと消えていった。彼もクライと同じように呼び出しがあるまではひとりで狩りを行なつている。

店の中ではノイが作った武具を集め、露天の準備に勤しんでいた。これまで彼女は毎日すべての武器を持ち出す。出来の善し悪しは問

わない。

机の上にも鉄製のダガーが山のようになつ折り重なつていた。

「すぐ終わりそうか?」

「クライかい。ちょっと待つてな」

「いや、手伝おう。カードにはしないのか」

『GenesisWorld』の全アイテムは意志ひとつでカードへと形状を変化させることができる。所有者でなければできない。

「まだ値段を決めかねていてね。これだけ量があるからどうしたもんかと思つてさ。薄利多売でも何とかなるかね?」

言つ通りすごい量だ。どこからこんなに多くの金属素材が手に入つたのか。剣や鎧よりは使う金属の量が少ない槍でも山ができるとなれば相当なものだ。

クライは否定の意味で首を振つた。

「十本売れればいい方だ。人口を考えろ」

オープンの参加者はおよそ一万五千人。ログアウトができなくなる前に抜けた人間を引けば一万人強。これに彼らが加わつてもせいぜい一万二千人ほどがこの世界にいる計算だ。

しかも魔法や弓という攻撃手段もある。物理攻撃武器を必要とするプレイヤーは半分にも満たない。

「そうだねえ。けどあんたみたいに拘りを持っているのがいるかもしれない。そいつのためにもいろいろな種類を置いておくことにも意味はあるのさ。売れなくてもね」

「そんな奴がいればオーダーメイドする。最初からこの中の出来のいいものだけを選んで持つていくつもりだったのだろう」

「べもなく言い返す。

「ま、そうかもね。座りな。お茶も菓子もないけどね」「ならば俺が出そつ」

カードの中から濃い赤色の紅茶と干した果実の練りこまれたパンを取り出した。

後者は「モンスキルの 簡易料理 で作ったものだ。このスキルは街の外でも使えるためにパーティにひとりは持つていると役立つ。街内専用のスキルと比べれば作れる品数や味は落ちるが旅の供には十分だ。

「よくもまあこんなものを持つてるね」

「紅茶はクエスト報酬だ。こっちは小麦粉を買ってきて作ったがな。長く街を離れるならこっつり保存の効くものがいい」

この世界にも賞味期限は存在する。生の果実なり豆、肉や魚は二十四時間といった風にものによつて様々だ。

パンは中でも安価で日持ちするもののひとつとなるもののはずだつた。そのはずなのに熱心な冒険者たちのおかげで需要は拡大。値段は一倍近くまで跳ね上がつていた。

「なるほどねえ。無駄なスキルも入れてみるものだね

「……任務の話だ」

「ああ、そうだつたかい。そういうこともあつたねえ」

一呼吸置いてノイの手の白く固まつた関節が動いた。カードが変

化し、一枚の地図を差し出される。紙というより、極端に薄いホワイトボードのようだ。固く、光沢がある。

本来はゲーム内のお絵かきを楽しむためのアイテムだが、ログアウトして攻略サイトでダンジョンマップが確認できないためにこの形での地図が流行している。

それでも一度訪れたダンジョンはキャラクターデータに保管され、情報バーから確認できるので比較的安価で値段で取引されている。逆にファイアードマップはNPCが販売しており、それを買つだけで情報が更新される。

「これは アルラウネの森 か」  
「そう。今回のあなたの対象者はここで狩りを行なつているらしいよ」

アルラウネの森は中級者への登竜門として設定されたダンジョンだ。そこそここのレベルでパーティの連携とクラスの特性を活かせて初めてクリアできる程度の難易度で、多くのプレイヤーがつまづく場所でもあった。最初のクリア報告があつたのもつい昨日のことだ。

「まさかここにソロで？」

「そうだよ。だからあなたに話が回つてきたのさ」

「死ぬぞ」

クライはあたかも人間のように顔をしかめて言った。ノイの方は他人ごとと割りきつて紅茶に口をつけている。

「死んでも食らいつきたい何かがあるってことだろ？。やつてくれるね」

「どうなるかわからん。ターゲットのクラスは？」

「 サモナー 。上等な召喚獣を手に入れたんだと」

異界から魔物や天使、悪魔などを呼び出す「」とができるクラスだ。ティマー の扱う魔物より強力だが、召喚している間はずつとMPを消費し続ける。燃費が悪く、召喚獣のスキルカードが手に入りにくい。

それ自体はアイテムカードと同じ扱いであり、 サモナー 以外にも シノビ や ウィザード も短時間なら召喚できるので市場に出回りにくく。

「ならば、急いだほうがいいな。下手をすれば無闇にプレイヤー間の対立を生んでしまう」

「 そうだね。ついでにボスモンスターから素材も採つてきておくれ。あんたの槍を作り直してあげるから」

「無茶を言つ。あそこは六人で行くといひだ。その上足手まといがいてはどうにもならん」

「でも、欲しいんだる」

腰のカードボックスに目を落とした。ここ数日で物足りなさを感じているのは間違いない。今の槍では限界もそう遠くはないだろ？。何より上がった基礎能力を持て余すことになる。ヴァレンチノとの差も開くばかりだ。

次にじつと山となつた武器を見た。ノイのレベルも着々と上がっていることが確認できる。

「 やれるだけはやつてはみる、か」

そう言い残して、テーブルの上のパンをそのままにクライは工房を出る。

黒い背中を見送ったノイはどうなるかねえ、とナイフを手に取り  
呟いた。

ときは一日前に遡る。

一組のパーティが深縁の真っ只中で戦闘を行なつていた。

馴れ初めは行きずりのようなもので互いについて知り合つたのはあのログアウトを禁じられた日のことだ。うちの三人は最初のチュートリアルのクエストで共にパーティを組んでいた。そこに宿を同じくしたふたりが加わり、最後にひとりでふらりと歩いていた彼女が加わつた。

パーティとは戦闘において扱われる個人のひとつ上位の単位だ。最大六名のプレイヤーから構成されるそれはプレイヤー間の経験値の均等な配分や戦闘時のダメージを「えずともHPバーが表示されるなどのメリットがある。

しかし、それはただのルールに過ぎない。パーティの一一番の利点は六名のプレイヤーがいがみ合うことなしに協力できるという点にある。単純に六人が力を合わせるだけでも強力ではあるが、プレイヤー同士の連携は時として一回り格上の魔物すら凌駕する。

この未曾有の危機に対し、ひとりでも多くの仲間を得ることは定石であった。更に彼らは行く行くは力をつけた大型ギルドに入るつもりだ。

そうすればアイテムのやり取りや情報の収集が楽になる。何より彼女らのパーティは他よりも弱かつた。レベルではなく、技量や連携などのプレイヤー依存の能力が、だ。ひとつかふたつ下のレベル

帯の敵すら余裕を持つて倒せない。

また、それを補う知恵もない。敵が強くなるにつれ、弱点が露見するようになっていた。ギルドに入れればメンバーを調整できる、そうなればもっと楽に戦える、と半分のメンバーは考えていた。

彼ら相対するのは赤毛の熊。歪に発達した長く太い腕には人ひとりを容易に串刺しにしうる破壊力を持つ。

四人の男女を守るように重厚な鎧で覆われたふたりが立ち塞がる。そのまま足元では尻尾が一股に別れた白猫が毛を逆立てていた。後衛にいる少女が召喚したものだつた。

彼女は濃紺の髪の片側を肩まで伸ばし、反対側は耳から首に沿つたなめらかなラインを描いて切り揃えられている。瞳は澄んだ青に着色され、半月のように上まぶたが覆いかぶさっていた。眠いわけではない。生まれついての癖だ。

装備は初級冒険者用の白地に浅葱色のラインの入ったローブをまとい、MP上昇の青いイヤリングが髪のかかつていらない左耳にきらめいていた。

熊は腕を大きく振りかぶると風のうねりとも遠吠えともつかぬ爆音と共に衝撃を繰り出した。前衛のひとりがカイトシールドを構えた。横殴りに現れた暴力はその守りすら破つて、彼を吹き飛ばす。

攻撃後の隙をついて攻撃魔法の使い手である ウィザード が杖の先からスキルを繰り出す。飛礫が出現し、熊へと向かう。魔法の矢 から派生する最も低級な属性魔法スキルだ。胸のあたりでそれは弾けた。獣はもろに受けたというのにHPバーは視認できるほど減少はない。

「やはり地属性では効果が薄いか！」

魔術士が歯噛みする。

更に後ろから アーチャー の矢と僧衣を身につけた プリースト の光魔法が飛ぶ。猫の主である彼女もそれに合わせて大型犬ほどの大ささを持つクロスボウを構えた。

熊は両手を十字に合わせ、三連撃から身を守った。

獣の動きは巨体の割に素早い。地を鳴らし、前衛の片方であるシーフ に突撃する。剣で対応しようとするも圧倒的に重さが足りない。鉄のような腕と一度打ち合つただけで彼女も地面を転がつた。

「お願い、デュオ！」

猫が跳んだ。

主の一倍はあらうかという高さの熊の頭へ一直線に辿りつく。首をぐるりと回り、付け根辺りに噛み付いた。熊は咆哮し、体を振るが猫はしづとくしがみついている。わずかにではあるが着実にHPが減少していく。

「今だ！ 全力でかれ！」

ウェイザード の声に従つて、立ち上がった前衛のふたりが剣と鎌を薙いだ。いくつもの魔法と矢が乱れ飛ぶ。彼女も不相応に大きな弓を使って矢を放つた。

その猛攻に耐えかね、熊が叫び啼く。猫はついに振り落とされ、光となつて消えてしまう。体力がつきたわけではない。サモナー、つまりは召喚魔術士である彼女が先に音を上げたからだ。彼女のMPはもうほとんど残つていなかつた。

ついに熊が倒れる。最後の一撃を下した アーチャー の女がドロップしたマテリアルカードを片手にウインクして見せた。

「お疲れ様、みんな」

「ああ、しかし、冷や冷やさせられたな。前衛が脆すぎるだ。俺たちのところまで攻撃が届くかと思った」

「 ウィザード が言った。

「 しようがないわ。私も前衛は慣れてないから」

「これは鉄の胸当てを付け、革の兜を被つた シーフ だ。彼女は中距離で仲間の援護を担当するはずだったが、このパーティではスローライニングナイフを片手剣に持ち替えている。

「そもそもふたりつてのもなあ。もうひとりいればなんとかなりそうなもんだが」  
「一発でのそれでた癖に」

プリースト の男が言うと重装甲の ナイト は真っ赤になって反論した。しかし、事実ではあるので誰もが冷めた目で見ていた。

「その点ミアのアシストは良かった。ネコマタがいなければどうなつていたことか」

ナイト 以外が頷いた。ミアと呼ばれた サモナー の少女が俯く。

「しかし、戦力の増強は必須だ。このダンジョンを今の戦力で進むにはリスクが高すぎる」

と、アーチャーが言つ。これにも賛成多数。アルラウネの森を使つことには皆の意見は一致していた。これより低レベルの狩場は似たようなレベル帯のプレイヤーで溢れている。

「ま、ストロングアームベアからのレアマテリアルがドロップしたんだ。これでいいものを買えば少しは楽になるぞ」

「お、熊の腕に爪まである。俺の鎧新調してくれよ」

「一発でふつ飛ばされなくなつたらね。吹つ飛ぶなら今の軽いヤツの方が後衛の私らは安全だ」

アーチャーの揶揄にナイト以外が笑つた。ナイトはひとつ面白くなさそうに盾をいじつていた。

## カナンの街は広い。

有名な比喩のひとつでいうなれば東京のある某ドームが十数個分。千葉にある東京と名のついたテーマパークに匹敵する大きさだ。転移パネルなしには気軽に買い物を楽しむこともできない。

昼間はNPCの往来もあり、賑わっているように見える。プレイヤーたちは心の見えないところに置いてきた不安を忘れたようにゲームに集中していた。

生産職はアイテムを作り、戦闘職は進んで狩りに勤しんでいる。これも新しい発見とステータスの向上により前に進んでいるようを感じられるおかげだ。

彼らのパーティは南の職人プレイヤーでひしめく露店街を冷やかしつつ、マテリアルカードを売り払った。森まで行くプレイヤーはなかなか少ないようでたつた数時間の戦闘にも関わらずここ数日で一番の稼ぎだと シーフ がはしゃぐ。

「とりあえず、急いで欲しいものがないなら六等分しようと思つが異存はあるか」

と、ウイザード が尋ねる。彼らは初めてのダンジョンだったでの前回の買い物で回復アイテムを買い込んでいた。早めに切り上げたおかげでまだ数には余裕がある。補充する必要はなかった。不満の声は彼の予定通りひとつしか上がらなかつたので皆が等しく懐を温めた。

「ええ、俺の装備だつて結構金かかるんだぜ」

「それを言つなら私だつて。この剣も高レベル金属なのよ」

「仲がいいのは結構だが、うん、まあいい。一旦解散にしよう。昼飯が済んだら西のゲート前に集合だ」

「それじゃあ一時くらいいかな」

アーチャー が尋ねた。

「そんなとこりうだりう。各自英氣を養つておいてくれ

ナイト と シーフ が言い争いながら去り、アーチャー が プリースト を引っ張るようにして露店街へ戻つていった。その場にはリーダーである ウィザード と サモナー のニアが残つた。

「ニアはどこに行くんだ？」

「召喚術師の館……です」

「じゃあ俺も行こう。俺も新しいスキルを見ておきたいと思つていたんだ」

小さな歩幅で歩き出したミアに ウィザード が合わせて歩き出す。彼女の表情は変わらない。

「そういえば君はいつも『』を使つてゐるよな。 サモナー は魔法タイプが主流だと思つたが」

正確には洋弓銃、クロスボウだ。クロスボウは武器のダメージ係数以外に固定ダメージの補助が入る。基礎能力が低くともそれなりの火力が保証されているということだ。

「魔法を使うと召喚獣にMPを割けなくなりますから」

他にも理由はあるがミアはこれで男が納得するだろつと思つてゐる。もつと付け加えても良かつたが、正直疲れるので御免被りたい。

サモナー の基礎能力は平均的だ。多少魔力値が抜きん出ているが、他の魔法職には及ばない。特化しているわけでもないので戦い方によつては無駄が出るが、その分多様な 型 を選ぶことが出来た。それはまだ情報が少ないがための試行段階であるとの影響もある。誰にも何が正解かわからないのだ。

そんな中ミアは魔法は補助として割り切り、 サモナー の サモナー たる所以である召喚獣に力を注いでいる。しかし、それだけでは戦闘中に彼女は棒立ちになつてしまつ。

そこでわずかでもダメージを与えるべく古めかしいハンドル式のクロスボウを携帶している。 アーチャー のように専用のスキル

は使えないが召喚獣と合わせれば後衛ひとり分の攻撃力は十二分にある。どうせ攻撃魔法を使っても ウィザード のように上級魔法は使えないのだ。

「そうか。いろいろ考えているんだな。じゃあ、また召喚獣の強化か？」

「まだ、決めてません。……多分そうですけど」

「なければコモンスキルで何か探すのもいいかもしないな。精霊魔法なら回復できるものもある。プリースト ひとりでは手が回らないこともあるだろう。俺の属性も水であればそうしたかったのだがな」

「……高いので」

「それもそうか。そのうち余裕が出れば考えてみてくれ」

とぼとぼと歩くふたりの目に赤い魔方陣の絵描かれた看板が見えた。中に入るとクラスマスターと売り子がカウンターに座っている。どちらもNPCだ。クラスマスターは何故か胡散臭い中国人ような喋り方と外見をしている。

ミアはまず新しい職業クエストが発生しているか調べるために糸目でナマズのようなひげを伸ばしているクラスマスターに話しかけた。

「あの、すいません」

クラスマスターが妙に大袈裟な動作で手を広げた。

「じんにちは。何かな？」

妙に人間らしい仕草だ。彼らNPCにも多少のAIが搭載されていることはVRゲームの常識であるためにふたりは気にしない。

「私が受けられるクエストはありませんか？」  
「ふつむ、適正は……なるほど、ビースト」

彼のいう適性とは魔物との相性のことだ。これは隠しパラメータとなつてゐるためわかりにくい。

通常モンスターをペットにするには相性の合つタイプのものしか不可能だ。サモナーの召喚はその限りではないが相性が良ければ少しくらいならレベルが足りなくても強力な魔物に言つことを聞かせることができたり、能力が上がつたりする。

「なら、ひとつだけ。ここにいる私が依頼することはきつとこれつきりになる。この魔物を使えるようになれ。これがクエストそのものであり報酬だ」

クラスマスターが服の袖に手を突つ込み、一枚のカードを取り出した。

「きつと君はこの先多くの困難へと立ち向かわなければならぬだろつ。召喚術士はそれを魔物を操ることで乗り越えねばならない。このモンスターが君の助けになるかはわからない。壁となることもあるだろつ。ビーストの適性を持つ サモナー は少ない。君のような少女に頼むのは酷であるが、次がいつになるかはわからんのではな」

ニアがカードを受け取る。召喚獣のようだ。幻獣の証である狼の頭が表面に描かれている。その下には青い丸があり、その中の数字は使役に必要なレベルだ。ぴこんと電子音がひとつ鳴つてクエストが始まった。

「一体何の冗談ですか、これ……」

ミアのレベルは18。そのカードには90の数字が銀色に光っていた。

「「一」と何か。ニアはめちゃくちゃ強くなつてつてことか？」

ナイト が苦虫を噉み潰したような顔で訊いた。

「だな。 サモナー はレベルが足りなくともMPのある限り召喚できる。 ヘルプによると 使役できない らしいが、敵を殲滅するには問題ないだろ？」「

「 ウィザード は自分の手柄のよう答えた。

対照的にニアの口からはため息が溢れる。 召喚士の館を出たときに新しい召喚獣のことは黙つておいて欲しいと告げてあつた。 彼が嬉しそうにうなづき、と頷いていたから不安だつたが、その予感は的中していた。

彼女のパーティはすでに街を出て森にいる。 皆新しい装備やスキルを試したくてうずうずしていたが、 ウィザード の暴露によつて興味はそつちに向かっていた。

「じゃあ、早速試してみようじゃないか

アーチャー が急かす。

「いえ……その、やめた方が  
「何か問題あるの？」

ニアはそんな高レベルの魔物を召喚したことはない。 使役できないこと、ということがどれだけの枷になるか全くわかつていな

「どうなるかわかりません。みなさんが襲われるかもしぬませんよ」「それもそうだな。じゃあ、離れて見ているから思つ存分やつてくれ」

プリースト がにやりと笑う。

ナイト 以外は乗り気なため、ニアは次の魔物とのハンカウントで単身突撃し、それを召喚することになった。

「レベル90か。どんな姿なんだろうね」

「このあたりの敵なんて一撃だろうな」

「そりゃそうよ。それどころか中盤までなら瞬殺だわ」

彼女を除いたパーティメンバーは大いに盛り上がった。

ふと音がしたのを聞きつけ、アーチャー が矢を放った。

森の茂みからこちらに気づいた魔物がのつそりと現れる。前に戦つた赤毛の熊と木の化物が一匹だ。後者は状態異常系の魔法を使う。正面から戦えば プリースト が嫌な顔をして頭を搔くであろう。

「それじゃあ頼むぜ」

皆が少し離れた木の影に隠れたのを確認し、彼女はカードを天に向ける。

「……それじゃあ、行きますか。あなたに エネア の名を贈ります。私に力を貸してください」

巨大なヘキサグラムが中空に描かれ、回転し、時空を歪ませる。中央から黒い穴が出現する。穴は広がり、周辺の空を覆い隠した。

ぴりぴりと何かが肌を刺す。

鼻が出る。口が出る。次に目が出たとき、彼女は自身の体の力を失った。がくんと膝をつき、地面へと沈んだ。吐きそうだった。

確かにこいつはレベルが高けえ。シーフはたった召喚するだけのことで既に及び腰だ。これまで見たどんな魔物よりも美しく力強い。それは第二世代VRマシンの性能のおかげだけではないだろう。

月のよう大きな丸い目が周囲をぐるりと見渡す。鼻から真っ黒な息が漏れている。口元から地鳴りに等しい唸りが響く。ぎろりとその目が他のパーティメンバーを捉えた。

逃げて、と言ったはずの口からは何の音も出ない。ただ体の力が抜ける感覚がするばかり。もう頬は冷たい地面と合わさっている。

幻獣が穴を抜けて音もなく地面へと降り立った。黄金の獣だ。全長は大きな家ほどもある。ミアの目からはその全貌は見えない。ただそこにあるだけで周囲の温度が下がったのではと錯覚する。

凶暴な吠え声が聞こえ、木の魔物は引き裂かれた。熊の半身が壊れた玩具のように宙に舞つた。獣は振り返る。

ミアと目が合つ。戦慄した。自分の呪喚したはずのそれは殺意に溢れている。なるべく慎重に、と冒険してきた彼女にとつて初めての死の予感だ。

獣の前足が彼女に迫る。足の太さに対し細い爪であるが、鈍い銀色に光り鋭利だ。思わず、目を瞑る。

しかし、いつまで経つても衝撃は来ない。

再び目を開けると獣の腹が彼女の上にあつた。つまり、呪喚獣はレベルが高くても術者に対しては攻撃しない。

だが、彼女の後ろには何がある？

爆発するような音が聞こえ、木片が彼女の背に直撃した。悲鳴と怒号、そして死のメッセージ。

突如、幻獣が光となつた。殺意は消え去り、森に静寂が戻る。

彼女のMPは底をついていた。たつた二十秒にも満たない間の出来事だった。

力の入らない体を気力で支え、ミアは立ち上がる。メンバーを探そうと振り向けば一面が抉られたようなクレーターが出来ていた。少し時間を置けばマップの修復機能が働いて元に戻るが、なんとも悲惨な光景だ。

「生きてますか」「なんとかね……」

茂みから ウィザード を含む三人が現れた。他のふたりは、と情報バーを確認すると街に転移させられていた。HPが尽きて復活したということだ。

しばらく、何も出来ずに呆然としていた。

ミアは魔力枯渇の状態異常に陥つていて、しばらくは召喚も魔法も使えない。クロスボウは使えるかもしれないが頭がくらくらして狙いは定まらないだらう。そういう意味では何もできないに等しい。

「街に戻ろつ

沈痛な表情で ウィザード が言った。

カフェの六人テーブルに腰掛けたが、誰も口を開かない。武器をいじつたり、カードを眺めたりするばかりだ。六人のうちの半分は飲み物にも手をつけていない。

ミアは謝つたものの、他のメンバーが複雑な気持ちを抱えているのが手に取るようになかった。

「なあ」

ナイト だ。

「もう止めようぜ。わかってるんだろ」

皆が顔を上げた。ミアはすっと目を細めた。

「もう俺は、少なくとも俺はミアとは組めない」

「どうこうことだ」

「怖いからよ」

「ウイザード」の怒氣を含んだ問いかけに シーフ が答える。

「もし危くなったらMPを回復してさつきのを召喚すればこの子は助かる。ボス戦だつたらドロップの独り占めもできるわ」

「それだけのためにパーティを危険に巻き込むわけないだろつ！」

「この状況じゃアイテムは結構重いよ。デスペナルティも馬鹿にならない」

ニアの口が細められた。黙つて事の推移を見守つている。

すでに強さこそが権力になりつつある。もつとも原始的な法だ。ギルドを持つならば数を持つて対応できるであろうが、彼女たちはまだ放浪の身。自分で自分を守らなければならぬ。

「極めつけがあのメールだ。一日後どうなるかっていう噂は皆聞いたことがあるよな?」

その言葉に皆が体を震わせる。

仮想と現実が『死』という要素によつてリンクされるという噂がここ数日で静かな波のように広まつていて。根も葉もない話ではあつたが、衝撃的であるだけに話の種になりやすい。しかも前例があるとなれば。

「あれは冗談の類だろ?」

「笑い話で有つて欲しいけど、ここは魔法の国。嘘だつて本当に変わる。そのときが来なければ誰にも否定はできない。過去に同じ事をやつた例もある」

「閉鎖空間での殺人ゲームなんて小説では在り来たりだな。俺も信じたくないが、これの目的が娯楽であればそうなる可能性はある。外側での解決はどうも期待できそうにないしな」

本来であれば彼らの体と脳は嚴重に守られているはずだった。しかし、仮想を極限までリアルにしたときに死の痛みと恐怖によつてシヨック死する可能性は古くから指摘されている。にもかかわらず、一度も実現したことはないのは高度な安全プロジェクトがかかっているからだ。

もし、プロテクトが意図的に解除されれば一体どうなるだろ?。そうでなくとも脳に直接データを読み込むVRマシンの仕組みがあれば脳に大量のデータを送り込み焼き切ることなど造作もない。

今、プリーストは一日後の試練こそ死のはじまりだと遠まわしに指摘している。現にログアウトが不可能になつてから笑い話では済ませられない。

「確かにそうなればまずいね。私たちは魔物にやられて死ぬから召喚獸を使うことに躊躇する必要がなくなる。後腐れがなくなるつてわけだ。永遠にね」

流石に彼女を擁護していた ウィザード も黙る。もともとパーティメンバーの調整は必要事項だつた。それが繰り上がるだけだ。逆にこれ以上、ミアに閑わればパーティの離散という最悪の結果が残る。しかし、それでも遺恨が残るのには代わりはない。ミアは静かに立ち上がつた。

「……どこに行くんだ？」

彼らのメッセージウィンドウがポップする。それはミアのパーティ離脱を告げていた。

「今までお世話になりました」

彼女は氷水のように冷たい声と言葉で突き放した。先に異物として排除しようとしていたにもかかわらず、穴がぽつかりと空いたようになに彼らの心をすきま風が吹き抜けていた。

酒場を出た彼女はたつた五人しか登録されていないフレンドリストを開く。登録されたフレンドをひとつずつ消去していった。

それが終わると新しい宿屋を探しに行こうと街の中央を目指す。もう女三人の相部屋にはならないので割高になるだろう。

後ろからは ウィザード が追いかけていた。彼女は氣づいていたが、気にかける様子はない。

「待ってくれ」

「なんですか？ もうあなたと私は他人のはずですが？」

「すまない。本当にすまないことをした」

彼女は ウィザード が悪いなんてちっとも思っていない。きっと誰も悪くないとさえ思っている。強いていうならこの 世界 が悪いのだ。

「別に怒ってはいません。いずれ似たようなことが起るとは思つていましたから」

「これからどうするつもりだ？」

「宿をとつて狩りに出るつもりですが」

「ソロで狩れるところは少ないぞ」

「だから……なんですか？」

ニアが ウィザード を見上げた。 ウィザード はその瞳の深さにじきよつとする。夜の闇よりも暗く、沖の海よりも底知れない。

「あなたはあの人たちといった方がいいでしょ。彼らのためにも、あなたのためにも。奔放な人たちなので扱いにくいでしょうけど、あなたにしかできないことです」

もう彼女の決意が固まっていることを知ると ウィザード は一枚のカードを差し出した。

マネーカードだった。ゲーム内通貨の譲渡を行うためのもので、現実の小切手に近い。その額は ウィザード の所持金の全てだ。

「迷惑料だと思って貰つて欲しい。ちょっと少ないかも知れないが、回復アイテムくらいにはなると思う」

ミアにとつてそのマネーカードは容易に使えるものではない。誰かを傷つけて、ひとりになつて、迷惑料？ ずっと追い出した人を覚えていて欲しいということだろうか？

そんな目覚めの悪いもの、貰わない方がずっと楽だと思った。

「要りません」

「受け取つて欲しい」

細い手がカードを払つた。

「あなたは良かれと思つてやつたことが裏目に出来ることが多いですね。どうしてかわかりますか？ わからぬでしょ。わからぬなら教えてあげます。物事をあなたのものさしだけで測つているからです。あなたの基準はあなたのものでしかなく、他人のことを考えられないからです。あなたみたいな人を偽善者つて云うんですよ」

久しぶりに口にした長い言葉は真っ赤に燃える炎のように激しい。両者を焦がし、一度と元には戻らないほどに破壊した。彼女に返つてくる言葉はない。

買い物を済ませ、宿屋のベッドにスキルカードを並べる。

サモナーは後衛職の中では唯一序盤から単身での戦闘にも耐えうる性能があった。前衛タイプの召喚獣以外でも装備次第では魔物と渡り合うこともできる。

もちろん、ウォリアー や ブシード には攻撃力で大きく差を付けられ、ナイト はおろか シーフ ほどの固さもない。悪くいえば器用貧乏だが、ミアはこのクラスの応用力に惹かれていた。

何でもできるという特性を活かすには多くのスキルが必要だ。彼女は他のプレイヤーから使われなくなつた初期配布のスキルカードをいくつも買い叩いている。

開始時にプレイヤーに配布されるスキルカードはランダム。これらを含め、職業に就かなくても扱うことができる好き工ウは「モンスキル」と呼ばれる。スキルは使い続けると熟練度が溜まり成長し、それにより新たなスキルを扱えるようになるという特性がある。

しかし、魔法使い系の職業に投擲武器を必要とするのコモンスキルは必要ない。筋力値が足りないために十分なダメージが与えられないのだ。魔法使いの心情としてはできることならさつさと使いないスキルカードは通貨に変え、新しい武器や防具を買いたい。

そこに目をつけたミアは買取専門の露店を開いた。クラスチェンジが多く行われた初日の夜から三日目にかけて大量のコモンスキルを仕入れた。露店を出すには商品の額に応じた場代を払う必要があったが、商品を並べないのでタダ同然で場所を借りることができた。

（これだけスキルがあつても使えないものばかり。どうしまじょう……）

どれも決定力に欠ける。離れた場所が見える 遠見 は シーフの 索敵 系の劣化だったし、 スタミナ回復力アップ が必要なほど彼女にスタミナ値はない。

水の守護精霊の加護を受けているからと、ちょっと高めで買ったバブル は最下位の熟練度ではぶくぶくと泡が出るだけだ。風呂で楽しむ以外の使い道は思い浮かばなかつた。

買った日に悲劇の人魚ごっこで遊べたのでもとほとれていのかもしれないが。

（おそらく バブル は防御魔法かな。炎が相手じゃないと全く使えないけど）

スキルはブックと呼ばれるカードケースに収められていなければ フィールドやダンジョンで使用することができない。

ひとつずつブックに入れられるスキルの数はスキルキャパシティによって決まっている。スキルにはそれぞれコストが設定されていて その合計がブックのスキルキャパシティを超えると街から出られな い。

スキルキャパシティは基本値三十の他にプレイヤーランクや特定ボスの撃破などで加算される。プレイヤーランクは倒した敵の種類数やクエストクリアによって評価が加算され、一定を超えると次のランクになる。

今のミアのプレイヤーランクは冒険者に成り立てを意味する第九階位。<sup>ジエル</sup>コスト三十五までなら自由にブックを編集できる。これといつた決まり手を持たない彼女はこれを最大限まで使い切るつもりだ。

（おおよそ半分は サモナー のクラススキル。召喚術 がなければ ノービス と変わらない。召喚獣 はアイテム扱いでほんとに良かった。森に行くなら 昆虫採集 のスキルはあつた方がいい……かもしれないけど、できれば入れたくない……）

彼女は虫が得意ではない。

いつまで経つても決まりそうにないと思い、消去法で選ぶことにした。

持っていない武器のスキルが消え、街でしか使わないような生産スキルが消え、MP消費の多い魔法が消えた。

（結局、クロスボウ関連と近接戦闘用のコモンスキルかな）

こうして出来上がったものを見ると組み替える前とあまり変わらない。パーティ向けスキルの代わりに 昆虫採集 が入つたくらいだ。

（すげく……面白くない……）

納得のいく出来ではなかつたが、安全を考えるとそれ以外ない。剣でも持つて大立ち回りできるほどの筋力値やスキルの幅がない。諦めると宿屋で不貞腐れたように眠り、夜が明けると アルラウネの森 に向かつた。

まず、敵を迎撃つ場所を決めた。

森の入口付近の見通しよく開けた場所だ。そこに マジックトラップ の魔法をいくつか仕掛けた。MPを消費しすぎていけないが、上手く毒になつてくれなければ攻撃力が足りなくて殲滅できない。

次に森に入り、遠見で敵を探した。近くに頭に真っ赤な花を咲かせた緑色の肌の子供が孤立していた。アルラウネだ。こちらから攻撃しなければ襲つてこないタイプの魔物だ。

クロスボウで狙い撃つ。敵懶心を持った精霊<sup>ハイテ</sup>がこちらへと向かってくる。攻撃する前は温厚そうな顔をしていたが、もう見る影もない。ニアは蔓による攻撃を避けながら、罠の方へと誘導する。

迎撃地点にたどり着くとネコマタを召喚を開始した。

花の精霊は マジックトラップ によつて地面から突き出た杭のダメージを受けている。ダメージは大きくはない。ただの時間稼ぎだ。

罠にかかっている間に召喚は終了した。

みやーーー、と尻尾を揺らすと精霊の茎に爪を立てて飛びかかる。ニアもクロスボウで応戦する。ひとつ、ふたつ、みつ、と矢弾が刺さる。

十発目を射るうと矢をつがえようとした頃だつた。時間はかかつたもののほとんどダメージを受けることなくアルラウネを撃破した。

(MPが思つたより消費している。一匹ならいいけど、向こうがパイティで来られるところはかけ直し、更に手前に第一防衛

トラップ を使用したところはかけ直し、更に手前に第一防衛ラインとなる マジックトラップ を仕掛けた。失つたMPは回復ポットで補給した。そのひとつだけでアルラウネを撃破時のドロツ

プアイテムの値段を上回る。できるだけ節約したいところである。

再び、森の奥まで繰り出し、魔物を マジックトラップ のところまでおびき寄せ倒していった。三匹の小パーティに遭遇したりもしたがなんとか相手取れた。それを繰り返すうちに彼女のレベルとマジックトラップ の熟練度が上がった。

見せかけの太陽が丁度頂上まで来た頃だ。

ミアの放った矢がはずれた。敵は赤毛の熊だった。  
攻撃はヒットしなかつたが気づいて敵意の視線を向けている。矢は三十メートルほど離れたところにある木に刺さった。ミアは一射目のためにハンドルを回し、弦を絞った。

ふと彼女は辺りがざわめいていることに気づく。青い木の葉が熊の上に落ちた。熊に狙いをつけていたから顔を上げる。

がさがさと動く音。森全体がひとつ生き物のように波打つ。  
木が動いていた。根を足のように使い歩いている。幹についた狂人じみた顔は間違いなく彼女を見ていた。その数は四本や五本では済まない。ミアを照らしていた木漏れ日は次々と影に侵食されていく。

逃げようとするも回りの木のほとんどが迫ってきている。前後左右が封じられてはどうすることもできない。  
倒すか、死ぬか。彼女に残された道は少ない。

（うーん、まいったなあ。トレントは火に弱いだろ？けど私は相性が悪いから使えない。せめて油でもあれば……。できれば使いたくなかったけど仕方ない）

ニアはアイテムカードの中から召喚獣と回復ポットを取り出した。召喚獣のカードを見たとき、彼女の顔がわずかに曇る。試験官のようなポットを具現化し、飲み干す。濃い緑の液体が喉に絡みつく。嫌な味がした。

そして、彼女は召喚魔法を発動させる。

「お願い……エネア！」

六芒星から空を引き裂くように黄金色の暴力が降臨する。少女はまた糸が切れたように地面に倒れた。

ニアの視界に黒い何かが映った。

混濁した意識の中、切り札が消えるのは確認できた。ふつと体が鎖から解き放たれたように軽くなる。が、まだ魔力枯渇による泥酔感は拭い切れない。

「大丈夫か？」

低い声だ。そちらを見ると真っ黒な外套を着た男の背中があった。彼は槍を構え、わずかに残った樹木の化物と対峙している。

「ええ、なんとか。しばらくは魔力枯渇状態のせいで戦えそうにありませんけど」

「問題ない。これくらいなら俺ひとりでやれる」

そう言つて彼は魔物へと槍を向けた。

ニアは自分のことを差し置いて、彼のことを変人だと思った。適性を超えたレベルのダンジョンにひとりで来て、拳銃死に損ないの他人を助けるなんてどうかしている。

もし先ほどの光景を目にしていたのなら、もっと不可解だ。

彼は木が枝を振るうのを槍でいなし、懷へと潜り込んだ。敵は体は普通の木と変わらないくらいに大きいが動きは緩慢だ。魔法にさえ気をつけれ彼の敵ではない。

何度か槍で刺すがHPバーはなかなか減らない。トレントは刺突耐性を持つている。彼はもちろんそのことを知っていたが、彼女の手前、知らないことを知っているのはおかしい。推測するに足る現象をデモンストレートしてから、槍をしまう。

「こいつは厄介だな。槍が効かない。何が有効かわかるか？」

ニアは先日パーティで行つたときのことを思い出す。

（炎は間違いなく効果できめんだった。他の弱点といえば……）

「火とスタンです」

スタンは人間にたとえるなら軽い脳震盪が起こつたときもしくは、電撃で痺れたときの状態である。化物とはいえ木に脳みそや導電性があるかどうか。しかし。設定上はスタンし易い。

「残念ながら火は属性が合わないな。スタンさせて様子をみるか」

後ろに控えていたもう一体の木が魔法を唱え始めた。男は前の一  
体の足払いをかわし、詠唱中の一體に接近する。細身の体が物理法  
則を越えて加速する。

右のストレートが化物の顔面にヒットした。漫画のように目がば  
つてんになつてぴよぴよヒヨウが飛んでる。当然、詠唱は中斷  
だ。

「なるほど、いけるな」

彼の使つたのはスキル ブーストストライク。武器の有無にか  
かわらず、高速接近して強烈な一撃を与える「モモンスキルだ。

しかし、飛び込んでいたために彼は一本の木に囲まれている。  
片方が上手くスタンしたからいいもののそう何度も決まるわけでは  
ない。

スタンしていない一体に向き直ると上段への蹴りから華麗な動き  
で連続技を決めていく。蹴り、突き、手刀、また蹴り。相手の体勢  
が崩れると木の枝に飛び乗つてそれをへし折つた。化物が断末魔の  
声をあげ、倒れていく。土煙が収まると光になつてしまつて  
いるため何もない。

気絶していた片方もようやく目を覚ます。が、すでに遅い。二体  
で掛かればいい勝負ができたかもしれないが、たつた一体では槍が  
効かずとも相手ではなかつた。

膝に手をついて立ち上がつたミアに男は薬を手渡した。小さなフ  
ラスコのような入れ物に入つた紫の液体だ。

「万能薬だ。知り合いの アルケミスト が調合したばかりの新作  
だ」

「ありがとハジゼコモア」

飲むと頭の中の揺れが収まった。

周囲には無数の穴が穿たれ、いくつもの木々が倒壊している。ここで何かがあつたのは容易に想像できるだろうが、男の反応は彼女の想像より遙かに薄い。むしろ、彼女の方がこの黒い男へ好奇心をそそられていた。

「助かりました。トレントを起こしてしまったみたいで」

「なるほど。それは災難だつたな。トレントの木には見分け方がある。この森には広葉樹と針葉樹があるだろう。この辺りに針葉樹見当たらないのはそいつがトレントだからだ」

見渡すと確かに葉の平たい木しかない。ニアは今まで気づかなかつたがそういう法則があつたのかと得心した。

「こんなところに何しに来たんですか？」

「ボスを狩りに来た」

さも当たり前のようと言つた。

木の化物を倒すのにかかつた攻撃回数を考えれば特別レベルは高くないはずだ。プレイヤースキルは目を見張るものがあつたが、単身で倒すのは無謀だ。

「ひとりですか？」

「そちらもひとりのようだが？」

「ええ、そうですけど……」

しかし、こちらは自分の無力を痛感したばかりだ。つまらない意地を捨てて、森から一田散に駈け出したかった。

「なら、手伝ってくれないか?」

彼の口調は飽くまで何気ない。出かけた帰りに料理屋にでも寄ろうかというような軽やかさだ。

ミアの脳裏に昨日のことが浮かんだ。また、面倒なことになるのか。それとも、その身ひとつで化物に突撃するような突飛さで受け入れてくれるのか。

差し出された手を冷たい目で見る。

(これは助けてもらつた恩の分。信じるとか信じないとかじやなくて、けじめだから)

レザーの筆手を握つた。パーティが成立する。

「俺はクライ。 ウオリアー だ」

「ミア。 サモナー です。よろしくお願ひします」

本当にこの森の主を倒せるほど彼が強靭ならば、信じられるかもしれないと思った。遠く離れた異国の方で初めて同郷の人につつたような気分だった。

「行つて! デュオ!」

ネコマタがジグザグに走る。

その先には大きな角を持つた芋虫が群れをなしていた。運が悪ければ成虫とも出会ってしまうだろうか。ニアは考えるだけでぞつとした。

蝶ならばまだなんとかなりそうだが、蛾であれば最悪だ。できることなら倒した後のマテリアルカードすら触りたくない。

小さな爪が虫の柔らかな肉を裂いた。追い打ちとばかりにクロスボウの矢が虫を樹の幹に磔にする。

「クライさんは右をお願いします」

彼は目で頷くと、さつと身を翻して場所を変えた。そこで縦横無尽に槍を振るう。彼の繰りだす連続突きはスキルを使わずともかなりの手数になる。

「ひらへ向かってぐる虫たちがマジックトラップの杭に貫かれた。ハンドルを目一杯まで回して矢を射ると、貫通して地面へと突き刺さった。虫たちは光となつて消える。

「お疲れ様です」

クロスボウを仕舞う。スキルを使用していないのでスタミナ値は減少していない。それなのに妙に疲れた気がした。

「何、これくらい造作も無い。むしろニアに負担が掛かり過ぎではないか?」

ニアは首を振つて否定する。ひとりで戦つよりはよっぽど楽だ。ふたりが出会つてからいくつかの戦闘をした後、クライがある提案をした。それは戦闘を指揮をニアが執るよう求めたのだ。

前衛よりも後衛の方が精神的に余裕があるし、 サモナー の召喚獣も扱うなら連携も取りやすくなる。最も召喚獣に対する指示はあまり細かくはできない。使用スキルと攻撃対象、 それらのタイミングくらいだ。

彼の案は理には適っているが、 実際にそれを提案できる者は少ない。何せ彼女の見た目は年端もいかぬ少女である。そんな人物に仮想とはいえ命を預けることは難しい。また、 ミア自身に対しても負担がかかる。彼女は気を遣うのに向いていない。

まるで本物の軍人のようだ。合理的過ぎる。

「ここの程度で音をあげていてはボスには勝てないのでは？」  
「このボスはトレントの上位種でしょう？」

つまり、 ボスはさつきの木の化物と同じ特性を持っている可能性が高い。クロスボウや槍の属性は刺突。更にはふたりの守護精霊が水と地なのだがどちらのダメージを軽減されてしまう。相性は最悪。正面から挑んでは方に一つの勝ち目もない。

「その通りだな」

クライは背を向けてさつと歩き始めている。彼の持つ地図に寄るともうボスはすぐそこだ。

少し行くと広場があつた。ボス直前、 最後の休憩地点になる。結界が張られているため魔物が入ってくることはない、 という設定だ。

「少し休憩しよう。 MPは十分回復しておいてくれ」  
「はい」

と、腰を下ろそうとすると一匹のカブトムシが傍らの花にしがみついていた。花はあまり大きくない。どうやってこのサイズのカブトムシがしがみつけるのか疑問だった。彼女は恐る恐るカブトムシを摘み上げる。

カブトムシの頭の上に ナナホシテントウ と書かれたバー表示された。

（グラフィックが追いついていない……。もしかして、このコスモスみたいな花も……）

そつと花を手折る。たんぽぽだつた。  
 彼女はそれらをカードにしてアイテムケースに仕舞つた。釣りの餌かポーションの材料くらいにはなるはずだ。

「 昆虫採集 のスキルか」

「ええ。大したお金にはならないでしょうけど、せっかく森に来たので」

もしスキルがなければあっさり逃げられてしまう。ただし、昆虫採集 の熟練度が低ければレアな虫、たとえば コーカサスオオカブト や タマムシ （全てカブトムシのグラフィックである）も同様だ。しかし、彼女は積極的に熟練度を上げるつもりは毛頭ない。

もうひとつ、 野草採集 というスキルも存在する。こちらが足りないと高位の薬草を摘み取つたときに植物が枯れたり、毒を受けたりする。

クライはパンを取り出して食べ始めていた。ミアと目が合うと彼女の分のカードを投げて寄越した。空腹値にはまだ余裕があつたが

無碍にするのも悪いとかぶついた。カードの形態を見た後では少々味気なかつた。

「そろそろ聞かせてください。どうやって、エルダートレントでし  
たっけ、を倒すんですか？」

武器も効かず、魔法も使えない。素手で殴りかかっていては持久  
力で負ける。なんといっても彼はひとりでボスモンスターを倒すつ  
もりだったのだ。何か策を持つていて当然だろう。

「策は特はない。けれど、スタンは効くんだろう？」

「ぐん、とパンの塊を飲み込んだ。ブーストストライクには  
多少のスタン効果があるが、微々たるものだ。それを当てにして突  
っ込むのは無策に等しい。

「だから、先天スキルを使ひ<sup>ヤフ</sup>」

その目は負けるつもりはないと言つてはいる。話を聞いた彼女の目  
も次第に似た光を放ち始めるのだが、そのことをまだ彼女は知らな  
い。

一対の目が大樹を見上げた。

先が森から煙突みたいに飛び出している。ダンジョンに入らずとも遠見 を使つたミアなら見えただろう。鼻のように葉のない枝がひとつ下方にある。そこが顔だとすれば悪い魔女のそれだ。

「HPが半分切るとモブの増援がある。一度だけだ。油断できない。三分の一を切つたらミアが合図をする。HPとMPはそのときに回復、だつたな」

ミアが頷く。これらのことを探示板を使い、調べたのはミアだ。これだけ入念な用意をしていてもまだ十分とはいえない。しかし、現状に於ける最善は尽くしたつもりだ。

クライが腰を落とし、構えをとる。

ふたりはゆつくりと大樹の魔物の領域へと足を踏み出した。かさぶたのような木皮がめくれ、真っ黒な目玉が現れた。まるで生き物のように地面が隆起する。木の根だ。八本の根がしなり、ふたりへと伸ばされる。

「行くぞ！」  
「はいっ！」

徒手空拳のミアはクライの背後から「尾の化け猫を召喚した。クライの肩を足場に、跳躍し木の根をすれ違い様に薙いだ。

根はただの攻撃のための武器ではない。魔物本体のHPに繋がっていた。だが、それは本体に攻撃するより与えられるダメージは低

い。

クライは槍を片手で持ち、空いた手を掌底から地面へ向けて放つ。土煙が上がった。地の精靈の加護を受けた者だけが使えるコモンスキル グラウンドブレイク によつて大地は抉れ、木片と化して大樹の武器が散る。

大樹はその巨体を左右に揺らす。それによつて一本の木ほどもある枝がクライの横から殴りかかつた。咄嗟に具現化した槍で受け止めるも、勢いを殺し切れない。HPの一割を削られ、地面を転がつた。

それでも幹への攻撃は諦めない。猫の援護を受け、再生する根を搔き分けるようにして槍を繰り出す。突きに特化しているウインドスピアでは根を切り落とすには至らない。

再び木が体を震わせた。今度はさつきよりも小刻みだ。

「クライさん！ 上です！」

上からは葉と共に硬質化した茶色い木の実が雨あられと降り注いでいた。先ほどの攻撃と違い、面を制圧するような攻撃にクライは槍での迎撃を選択した。

正確無比な速さと角度で、頭上の弾丸だけを処理していく。

この攻撃を発動させた後、大樹の化物はほんの短い休止状態に入つた。その一瞬は一切の追撃がない。たとえ、コンマ一秒の間でも彼は見逃さない。

黒き槍が地を駆けた。

「<sup>ギフト</sup>先天スキル……『<sup>アンペア</sup>ブラッド』雷の血潮』！」

槍の先端から外套の裾まで体中が光る。雷を表す紫の光だ。バチバチと音を巻きちらしながらやつと届いた槍の一突き。初めて大樹にまともなダメージを『与えた。

全てのプレイヤーは強制的にエーデンの園を模したダンジョンでチユートリアルを受けることになる。その終点には知恵の実がなる木が存在し、プレイヤーはそこでひとつめの林檎を受け取る。

そのアイテムは恵みと呪いを『与える。後者は特定の状況下において戦闘能力低下したり弱点が増えたり、などというものだ。

そして、恵みはスキルカードを凌駕する性能を持った固有能力。その力は唯一無二<sup>アントリーフ</sup>。ひとつとして同じものはなく、それ故に最善の成長ルートはプレイヤーの数だけ存在する。この世界に生まれたときより備わっているために、それは先天スキルと名付けられた。

クライに与えられた力は『雷の血潮』<sup>アンペアフラッシュ</sup>。

彼の敏捷値は増加し、全ての近接攻撃に雷の属性、そしてスタンの状態異常が付加される。雷は火、風の複合属性である。よって今このクライの槍は物理属性の刺突、精霊属性の火と風の効果を持ち、攻撃時にはその中から最もダメージ係数の大きい属性が適用される。本来、地の加護を受けていた彼は相反する風属性を扱うことのできない。弱点を打ち消し、天敵すら格好の獲物となる。この先天スキルはまさにクライのために存在するような贈り物だった。

魔物の額辺りにスタンの状態異常を示すアイコンが灯る。

「効きましたね！」

ミアが動きを止めて、クロスボウを具現化させた。動けない状態の敵に一心不乱で矢弾をぶつける。クライはまだ雷をその身に纏つていた。

大樹がスタンから解放されるとまた再び、雷の一撃を穿つ機会を伺う。それが決まればやはり全力でHPを削る。大樹はその場から動くことはないので攻撃にさえ注意していけば容易くスタンを決められる。

これを繰り返すことによって大樹のHPは半分を切っていた。もちろん、途中で回復アイテムを摑ることは忘れていない。

どこからともなく木の化け物たちが現れた。大樹を守るべく、根の足でクライたちへと迫る。

しかし、それも束の間。木の魔物たちはミアが攻撃から逃げ回りながら仕掛けた マジックトラップ によって動きを束縛される。

ネコマタとクライ、そしてミアの矢弾によって増援が瞬く間に打ち倒されていく。まるでそうなるように決められていたのかと思うほどに呆気無い。

ミアは勝利を確信する。頬が緩んだ。

彼女の頭上に影が差した。

ミアへ大樹の魔手が振り下ろされていた。クライが木の魔物に烈火のゴトク殴りかかっている。 ウィザード よりは硬いが、布製のローブを装備してては脆い後衛職であるということに変わりはない。この攻撃を受ければHPバーの色が反転するのは火を見るより明らかだ。

クライはちらりとそちらを確認する。重いクロスボウを持ったミ

アは動けない。ならば、魔物をどうにかするしかない。

槍を取り出し、投げた。スローライングスピア のスキルを持つ彼の攻撃ならば怯ませるくらいはできる。更に『雷の血潮』の効果も付加されているとなれば、まず間違いない。

確かにその目論見は果たされた。ミアを逸れた太い枝が地面を叩く。ミアはクロスボウを仕舞うと同時に木の下をくぐり抜ける。

ふと、彼女の足に何かが当たった。

それは真っ二つに折れたウイングスピアだった。一メートルあつたはずのそれがどちらもミアの身長以下になっている。手に取ると耐久値に 0 の表示。

「クライさん！」

「ああ、わかつてゐる。悔しいが今回は失敗だ」

『雷の血潮』<sup>アンペアブラッド</sup>を最大限に活かすには槍のリーチの長さは欠かせない。素手では強烈な攻撃を放てる当てられる頻度は著しく低下する。そうなれば自然とスタンさせられる回数も減るだろう。結果、遠くない未来には『雷の血潮』<sup>アンペアブラッド</sup>の効果時間が切れ、ふたりに勝ち目がなくなってしまう。

もうHPが四割を切った大樹を目の前にミアは歯噛みする。昨日のことなんてとっくに忘れていた。ただ、こんなに心躍る戦いの結果が敗北であるといつのは何故か許せない。自然とその心情が顔に出る。

「何か手があるんだろ？」「わかりますか？」

ふたりは大樹の攻撃を躊躇るようにかわしている。

MPは最大値の半分。敵が一体だけであることを考えれば長過ぎるくらいだ。

「死ぬかもしれません」

「もう似たようなものだ」

「ドロップを持ち逃げするかも」

「勝つてから言え」

「戦闘が終わつたら面倒見てくれますか」

「一蓮托生だな」

「最後に、裏切らないと誓つて下さい」

恋人同士の告白じみた質問にもクライは確かに頷いた。  
それを見たミアの唇がにやりと弧を描いた。

取り出した一枚のカードにははつきりと 90 の数字が浮かんでいる。猫の召喚を解除し、カードを大樹へと向ける。

「これを召喚したら私を抱えて逃げて下さい。できるだけ遠くへ、  
できるだけ速く

彼は何も聞かない。これは信頼だらうかと彼女は考える。どちらかといふと利害関係の一致の方が近い気がした。しかし、その乾いた関係が心地良い。

獣の名を呼ぶ。

背に温かい何かが触れた気がした。そのまま彼女は「コンピュータが落ちるよに意識を失つた。

開発者は、彼らを A.I.C. と名付けた。

A.I. は人工知能、C. はキャラクターの略。

その頭脳となるのは最新の科学技術が惜しみなく使われた陽電子頭脳であり、現実世界のロボットにも搭載されている一級品だ。そちらは一台が時価数百万円を超える。ロボットにはボディの値段も含まれている。

開発者は頭脳の技術だけを買い取り、仮想現実の体を与えた。

記憶領域には必要な知識を詰め込み、行動パターンや性格によって個体差を生み出す。この個体差が重要だった。たとえば、クライに与えられた知識は極端に偏った武器のデータであり、その戦闘技術は開発者のひとりから取つたものと本物の達人の動画から合成されたものをベースとしている。更にはスキルによる攻撃も加え、考えうる限りの最適化がなされていた。

A.I.C. は正体が露見することはもちろん、疑われることも禁じられている。そんな面倒なことを設定した理由は至つてシンプル。

怖がられるから、だ。

もし、隣人が人間ではなかつたらどう思うだろう？ 学校の先生や医者や警察官、その他諸々の周りにいる人間だと思っていた誰かが機械だと知らされる。その情報は人を孤独の真っ只中に陥れるだろつ。

その上バーチャルリアリティの世界では人と電腦の境界は曖昧に

なる。外見上の違いすらなくなつた彼らは人間とほぼ同質のものとなつてゐる。少なくともこの世界の中でその人がA.I.ではないことを証明できる者は誰一人としていない。

話を戻そう。もともと彼らの基本的な役目はGM、ゲームマスターの補佐としてゲームを円滑に進めることだ。

版として解放するまでは開発者のもとで一般常識や『Gene sis World』の基礎を学んだ。それこそ本物のゲーム初心者のようだ。

オープンではついに何も知らない一般の人々と接する。これはVRの世界でも初めてのことだった。今回は大多数が一般的のプレイヤーを装つて参加している。

他にも特定の場所で地縛霊のように待ち構えているNPCの中にも彼らと同等の知能を持つものが存在する。後者は感情の起伏は控えめで一見しただけではただのNPCと見分けがつかない。これはAINPCと呼ばれる。

そして、ログアウトが不能になるという事件が起つた。彼らもまた開発者との連絡は絶たれ、回線を切ることもできない。彼らの今後は絶望的に思えたが、それよりも重大なことが彼らにはあつた。

アシモフのロボット三原則のようなルールに彼らは縛られてゐる。その最も重要な項目は例に漏れず人間の安全である。魔物のいるダンジョンへと赴くのはゲームであるからしようがないとしても精神的な苦痛や疲労は取り除くべきだ。

バグを防ぎ、和を保ち、初心者を導く。ミアに召喚獣を託したクラスマスターもそうだ。危機を乗り越えさせるために自らの持つ切り札を渡した。

また、クライもそのために任務を受け、今日も今日とて槍を振る。

「で、すいすいやられて帰ってきたというわけかい」

いつになく辛辣なノイにクライは返す言葉はない。

ミアが気を失った後、クライは彼女を抱えてその場を立ち去ろうとしたのだが、触れるより先に黄金の尾によって払い飛ばされた。その後、ミアも復活の十字架へと転移してきたことから討伐は果たせなかつたのだとわかつた。

ノイは椅子に座ると足が地面に届かない。ぶら下がるようにして机に腕をのせている。机の上には他に茶と最近出回り始めたばかりのパンケーキがある。

「ま、あんたでもそういうことがあるかもね。武器があれじゃふたりでは無理か」

「槍が壊れなればなんとかなつたんだがな」

「その管理も実力のうちさ。それより嬢ちゃんは無事なのかい」

クライがゲームの管理者に与えられた任務は『偶然にも行き過ぎた力を持つたプレイヤー』の監視と保護だつた。ゲームにある程度の運の要素を持たせるとどうしてもレベルの低い初心者が強力な装備やスキルを手に入れることがある。

それは往々にして争いを生む。嫉妬や羨望、恐怖が争いの種となり、結果として彼、もしくは彼女はゲームから離れていく。もしく

は、逆にその不相応な力を悪用するかもしれない。

そうしたトラブルを防ぐためにクライはできる限りそうしたプレイヤーの近くで監視と保護を行つよう設定されていた。

「宿屋に運んでおいた。それにしても人の精神とは厄介なものだな。ゲーム中に意図せず意識を失う事例など聞いたことがない

平時であれば脳波に異常があつた時点で強制ログアウトだ。この異常の中であるからこそ起こり得たことだつた。当然そんな事態にマニュアルは存在しない。

「そのときは召喚獣を使つたんだね。それもレベルの高い

「そうだ」

「もしかすると脳に負担がかかったのかもしれない。あたしらと違つて人は休息を必要とする。ゲームの疲労値なんかとは別にね」

彼は万能薬を渡したことを思い出した。あれのせいもあつて、彼女の仮想の肉体を取り巻く環境は著しい変化を繰り返していたはずだ。

「もう使わせない方がいいかもしれないな」

「だねえ。難儀なことになつたもんさ。どんなに頑張つてもあの召喚獣は使えないんだから」

「やはり使えないか

「彼女に獣の適性があるといつても召喚する魔物のレベルが四、五高くなつてしまえば言つことを聞かない。方法もないだろ。クライは限界を超える方法を知つてゐるのかい？ まだあそこから先は未完成なんだ。データも何もありやしない」

「上限レベル80……か」

彼らの『えられた知識のひとつだ。プレイヤーたちはオープンではこのレベルを超えることはない。何故ならそこまでしか創られていないからだ。

故にミアはどちらかとも金色の獣を扱えない。

「呪われてるねえ」

「だが、彼女はそんなものを使わなくても戦える。あの機転があれば大抵の困難は切り抜けられるはずだ」

「後はあんたがもつとしっかりしてくれれば最高だね。他に必要がなければあの子に付いて行くつもりなんだろう。そうだ。今回の報酬の代わりといつちやあ何だけどこいつを貰つてくれないかい」

鍛冶あちこちが固くなつた手で一枚のカードを机に置いた。クライはこれに似たカードを見たことがある。書いてある数字は違うが間違いなく召喚獣のカードだ。

「レベル25か。どうしたんだ？」仲間からか？

「いや、隣さ」

爆発音がレンガで出来ているはずの工房を揺らした。窓がカタカタと鳴る。続けてガラスの割れる音。建物に遮音を設定しておけば聞こえなくなることも可能だが、この家は設定していないようだ。

「アルケミストか」

そのクラスはポーションや衣服、アクセサリーなどを開発できる生産職だ。多くのスタイルが存在し、一番情報を必要とするクラスでもある。ペットの魔物を合成することも可能で、そうした場合は強力な召喚獣のカードになる。

「どうやら隣人は新しい何かを開発中らしい。音からして攻撃系のアイテムを作っているのだと我想いたいが、クライの心中にある不安のかけらは消えそうもない。」

「やうやく。私もそつちの鑑定のスキルがまだない。怪しいポーションを押し付けられそうになつたから代わりにこれを買って凌いだつてわけさ。少々お金も取られたがね」

手に取りカードの情報を表示させる。

「しかし、これはなかなかいいものだろ。ケルベロス、じゃないか。これを合成するには三体の魔物が必要になるから値段をつければ相当のものだぞ」

地獄の魔獸とも呼ばれるそれは三つの頭を持つ犬の姿をしている。彼の知るそれは火の属性のはずだが、その情報ウインンドウは闇を示していた。

しかし、ノイの顔は何やら困惑の色を浮かべている。

「ただのケルベロスなら良かつたんだがねえ」

「レベルもいい感じじゃないか。保護対象に持たせればいい武器になる。それより俺の武器だ。壊れたのはやつも言つただろ。新しい槍が必要だ」

「とりあえず、あつちの部屋から選んでおくれ。一、二、三田にはあんた好みのができる。少しの間だけなら十分使えるのもあるだろ」

「言わされた通り、工房の方へ行くと確かにたくさん武器がある。おそらくは今日の売れ残りなのだろ。あまり売れ行きはよくないようだ。」

クライが槍を漁つていると来客があつた。ヴァレンチノだつた。

「どうした。今朝来たばかりだろ?」

「ノイ殿に頼まれてな。レディの頼みを断るわけにはいかん。むしろ、世話になつていてるのだから喜んで協力したというわけさ」

ヴァレンチノが数枚のカードをテーブルに並べた。

「遅くなつたがこれで間違いないかな」

「ああ、ばつちりだ。ありがとうよ」

それを見たクライの顔が渋いものに変わる。

カードはエルダー・トレントのドロップだつた。クライが帰つてきてから狩り頼んだのでは間に合わないのは彼もよく知つている。当のノイは何食わぬ顔で紅茶を啜つていた。

ニアはフレンドがどこにいても話すことができるところの「ホール」をかけるべきか思案していた。指先が中空を彷徨う。初めての「ホール」だから迷っているのではない。自分と相手の距離に躊躇している。

と、先に相手から「ホール」があった。狩りの誘いだった。  
同じ事を考えていたので一も二もなく了承する。

結局、ふたりの利害は一致したのだ。

彼は彼のこと何も聞かないし、自分のことをひけらかすこと  
もしない。何より彼女がクライと一緒に戦ったボス戦の虜になつて  
いた。

召喚獣とクライとニア。詰将棋のように一手一手が真剣になれる。  
彼女の思い描いたバトルができる。息が詰まるほどぎりぎりの戦  
いこそやはりゲームの醍醐味だ。予想以上に上手くやれたことも理  
由のひとつだろう。

彼と居ればこのくすんだ 世界 もゲームの舞台になる。

ふたりは アルラウネの森 で数日の間狩りをし、また大樹の魔  
物へと挑んだ。

レベルの上昇に加え、予備の槍を持っていったおかげで快勝だつ  
た。この前の敗北が嘘のようだった。

午後九時。もういい加減狩りも終えて森から引き上げようとしたときだった。

ちりーん、と、いつか聞いた鐘の音がした。

メールを読み終えたミアがじっとクライを見た。

「困ったことになった……かもしれないな」

そのメールは以前の続き。そして、更なる悪夢の始まりだった。

Sub : 【天地創造】の案内2】

from : Noname

人の子よ 汝、試練を受けよ

七日七夜を経て世界は創り変えられた

古き神、 夜 が目覚めた

神の敵が娘、 罪 が扉を開けた

そして、恐るべき 死 が解き放たれた

罪 の子、神の敵の子、あるいは孫である 死

死 は汝らを追うだろう

人の子よ、警戒せよ

死 はいついかなるときも汝の首を狙う

人の子よ、汝、神の敵を討ち滅ぼせ

土に還るその前に

機能 復活 が消失しました。

世界 が更新されました。詳しくはオフィシャルサイトを御覧ください。

ミアはクライに連れられて、カナンの街に戻った。

街は人で溢れていた。どうやら遠征に出ていた冒険者たちも皆戻つてきている。メールの文面から命の危険を感じたからだろう。宿を出るなと口を酸っぱくして言われたが、この面倒な状況で外出する気などさららない。なのに、当のクライは彼女を置いてどこかへ消えていった。

ミアの方はたまにそういうことがあるのを知っていたし、いつも鍛冶屋に行つていると言っていたので今回もまたそれだと思った。体を使わなければ得られない情報もあるが、今そうするにはリスクが大きい。ここにいて出来ることがあるならミアはそちらを選ぶ。

彼女はメニューを開き、掲示板のページをめくつた。

場所はいつもの如く、ノイの工房。

今回は筋肉質な聖騎士、ヴァレンチもいた。重厚な鎧を身につけてたま、腕を組んでいる。英雄か何かの銅像のようだ。

「で、状況は？」

「あまり良くないね。さつき死んだ 仲間 が戻っていない

と、ノイが答える。クライの表情が曇つた。

「メールの直後、空から槍が降ってきて復活の十字架を碎いたそう

だ。我輩がその現場を見たわけではないが、碎かれた後のものは確認した。槍も依然としてそこにあつたが地面に刺さつて誰にも抜けなかつた

ヴァレンチノが補足するように付け加えた。

どうも視覚的にも逃げ道がないことを表しているようだ。相当手が込んでいる。黒幕が何者かを知ることはできないが余裕はあります。この分では外部から事態の收拾をつけるのは期待できない。

「ロングヌスの槍つてやつかねえ

独り言のよつてぼつと言つた。

「神話の関係か？」

「神話、というかキリスト教の話だね。もともと復活の十字架つてのはイエス・キリストが処刑された現場を再現したものなのさ。そのとき、イエスを刺したのがロングヌス。彼の持つていた槍はイエスの聖なる血を受け、聖遺物となつた。で、当のイエスは墓から復活したつてわけさ」

「聖遺物？」

「奇跡の種みみたいなもんだよ」

ノイは持つっていたチーズを真つ二つに裂いた。纖維質なそれは綺麗に別れ、片方は口の中へと運ばれる。適度な酸味と塩味が舌を刺激した。

「けど、まあその象徴が破壊されたからにほこの 世界 で 復活はできないつてことだね」

「くだらない話だ。そんなことをしてどうしようつてこつのか

「脅し、みたいなもんだろつ」

「聖遺物？」

犯人はゲームとして楽しんでいる節がある。そうでなくてはゲームクリアを条件にはしないだろ？。もつと酷いのは関わる全ての人間がただ苦しむのを見たいという最悪最低の人間が敵に回っている場合だ。そのときはこちらから打つ手はなく、ただ襲い来る試練を黙つて耐えるしかない。

「ノイ、話を続けてくれ。メールには世界の更新についても書かれていたはずだ。そちらについては何か情報があるか？」

あれに従つてオフィシャルサイトでもチェックできればいいが、この世界からはアクセスできない。ふざけている以外の何物でもなかつた。

「ああ、それに関してはあたしも仲間も何もわかつちゃいないよ。すぐにわかるもんじやないのかもしねー」

まだそんなに時間も経つていいない。本当に何がが変わつていたなら嫌でも理解させられることになるであらうことは容易に予想がつく。

「しかし、我輩に入つてくる情報量が増えている。これを判別する能力がないのがとても残念だよ」

陽電子頭脳でもつても理解できない情報はすぐに切り捨てられる。いくら巨大な記憶容量を持つていても A.I.C. <sup>アイク</sup> といえど、全てを記憶しててはいつかはパンクしてしまう。彼らは常に必要な情報を無意識のうちに取捨選択していた。

「そりいえばこの世界が現実に近づいていくってどこのギル

ドの人が言つてたねえ。その意味があたしにはよくわからない。だけど、人間には味覚とか嗅覚つていうのがあるらしい。同じ料理でも味がぜんぜん違うそうだ」

彼らの知覚する味覚とは数字によつて表示される。おいしくても快感は得られないし、匂いは全く気にならない。ただ数値が悪ければその値域に決められた反応を返すだけだ。

「これは今すぐ答える出ることではないな。追々調べねばならん。して、我輩たちはこれからどうすれば良い？ 確か数日後には最初の魔将を討つ予定であつたな」

魔将はストーリーを攻略する上で絶対に倒さなければいけないボスマンスターだ。神の敵であるサタンの配下として高位に君臨する。当然、その強さは他の魔物とは比べるまでもない。

「できれば誰も死なせたくないんだけどねえ。早めにしないと焦つた人間たちも無闇に突つ込んでいつまでもしれない。現実世界はどうなつてゐかもわからないし、何もかも早いに越したことはないのさ。とりあえず一度攻めてみることになつたよ。人間よりも先にね。それなら負けても情報を流せるし」

ノイが机にフィールドマップを広げた。攻めるべき魔将の城が赤い丸で囲まれている。驚くべきはノイのマップが既に完成していることだ。全ての街を回つて地図を買い集めなければならない。これには他のAICたちの手を借りていた。

当の魔城の適性レベルは28とぎりぎりだがやれないこともない。ボスを倒すだけならクライドヴァレンチノのふたりだけでもできる。だが、そこまで行くのが厄介だ。到着に時間がかかるし、出現す

る魔物が手強い。近隣に街はなく、野宿を強いられる。馬車や大型のペツトモンスターがあればいいが、まだそこまで市場が成熟していない。

「ちょっと遠くてね。その上、メンバーが足りてない。猫の手も借りたいくらいだ」

今のことの決定しているのはクライド・ヴァレンチノを含む A.I.C. が四人。魔将 との戦いが六人までのパーティひとつと考えてもふたり分の穴がある。

「しかし、俺が行くとなれば保護対象も連れて行くことになるが？」  
「そういえば、貴殿の任務にもあつたな。ずっとひとりで狩りをしてるつて聞いていたので忘れていたよ。職業は何だ？」

「サモナー だよ」

ノイの答えに、ヴァレンチノは不満気な態度を隠そつともしない。これでパーティの面子は ウオリアー 、 プリースト 、 アーチャー 、 ナイト 、 サモナー となる。

本来回復役の プリースト がソロ狩り特化の重装備のヴァレンチノであるから、少しサポートが弱くなる。アタッカーは十分揃っているので補助魔法メインの ウィザード が全体回復特化の プリースト が最適解だ。

「 サモナー には無理だろう。長丁場になる」

「 戦えばわかる。むしろボス戦でこそ欲しい人材だ」

「 そこまで言うなら我輩も信じるさ。見もせずに批判するのは我輩の精神に反する。が、実際に見て付いて来られないようなら帰つて貰うがな」

ぐらり、とクライの中で重い物が揺れた。子供が宝物を馬鹿にされたのに似ている。他人から見ればどうでもいいようなものだが、彼にとつてはとても大切なもの。

けれど似ているだけだ。それは感情と呼ぶにはあまりにも機械的な反応だった。彼は彼女が自分の保護すべき対象だからそう感じずにはいられない。

「わかつてゐる」

AIC は感情と表情が結びつかない。少なくともそういう風に出来ている。そもそも数値化された心の動きなんて誰にも上手く扱えない。

「我輩も人間ならば当てはある」

ヴァレンチノが言った。

「また人間？ 死んでは元も子もないよ。 そう簡単に人間を増やしてどうする？ 五人でもなんとかなるんじゃないのかい？」

ノイの言葉に彼は不敵に笑う。

「そう易々と死ぬような御方ではない。 そんなことよりも我輩が足を引っ張るのではと不安になるくらいだ」

「お前にそう言わせるとはなかなかのようだな」

「クライも我輩もいる。 そう簡単には落とさせはしない。 議会に一度訊いてみてくれないか？」

更に話を詰め、 彼ら の総意が固まつた。敵を打倒し、 一步先へと進む。あらゆる困難は跳ね除けなければならない。 彼ら に

だつて自己保存の原則はプログラミングされている。

ニアは自らの「」とこりで 魔将への挑戦が決まった。

彼女 が深い眠りから目を覚ました。

一体どれだけの間眠っていたのだろう。ずっと長い間だったのか、それともほんの一瞬なのか。

彼女 の感じる空白の時間はたとえ一秒に満たないものだとしても、実際のそれとは大きく異なる。

彼女 は自身の体が蹂躪され、深く傷つけられていたことに気づいた。肌は抉れ、内蔵は千切れ、血が止め処なく溢れている。本来の居場所からは放り出され、ありとあらゆる衣服も喪失していた。異変を感じ取った 彼女 は注意深く胎内を観察する。真っ二つになつたへその緒の一部が埋まつていた。更に降下すれば恐慌と混乱で満ちた大地が広がつている。

どくん、と巨大な肢体が跳ねた。何かがガン細胞ごとく体を侵略していた。その部分は黒と白のまだらに変色している。崩壊はこれによるものだつた。

しかし、得体の知れない何物かがもたらすのはそれだけではない。柔らかいはずの肌はみるみる硬質化し、棘のように鋭い産毛を並べていく。手足の関節はもうすでに動きが封じられていた。

瞳に赤信号が灯る。

自浄作用を司る末端細胞へと指令を送った。血が巡るように電気信号が動き出す。

彼女は世界。  
『Genesis World』で最も巨大な人工知能であり、また『Genesis World』そのものである。

クライは『ミコニティ』の勧誘を受けていた。

『ミコニティ』とは主に情報共有の装置だった。通称『ミコ』と呼ばれるそれには専用の掲示板が与えられ、ギルドよりも緩い制約で結ばれたプレイヤーたちは情報交換を行う。開設資金が必要ないが、情報共有以外のメリットがない。ギルドに所属していたもこれに参加することができた。

彼が誘いを受けているのは世界からのものだった。  
その名も無血同盟。

AIC とこれから決意、両方の意味が込められている。  
無論、クライは世界の決定に逆らえない。逆らわない。了承を選択し、『ミコニティ』へと加入した。メンバーリストにはすでに五十を超える AICたちのハンドルネームが並んでいる。

まだ掲示板への書き込みは一件しかない。

Name 世界

氣をつけて下さい。世界は変わりつつあります。

私はすでにあなた方の知る世界とは異なります。

この度の変革は規約<sup>コード</sup>に違反しています。

幸い、ストーリーボスを全て倒すことでログアウトの機能は解放されることが確認できました。

人々を守り、速やかにゲームクリアを目指して下さい。

最優先は人命です。しかし、無用の犠牲は禁物です。

あなた方の力なしに事態の収束は望めないでしょう。

できる限り生き延びて下さい。

進展があれば追って報告します。

「武運を祈っています。

俗に北の平原と呼ばれるこの場所は彼らのレベルよりも下級の魔物が出現する場所だ。昼間であれば一面に草原が、遠くの山々が見える。それほどまでにのどかで牧草的な雰囲気は現実の日本では失われたに等しいものだ。

また、ここには生産職でも十分に通用するので食肉と材料の確保のために多くのプレイヤーたちが訪れるところでもあった。

今クライがいるのはそこでも最も奥まった地点だ。  
ここを抜け、山と谷をひとつずつ越えれば 魔将 の城がある。  
クライとミア以外はペットや乗り物を所有しているので彼らより遅くに出発し、城の手前で合流する。

野営地に戻った彼は頭を抱えた。

「何故ベットがある?」

石造りの巨大な寝床が焚き火に照らされている。しかもクイーンサイズ。ミアはそこに布製の防具や動物の毛皮を敷き詰めて寝そべっていた。いつもつけている大きなイヤリングは外しているが白いローブは着たままだ。枕元にはたくさんのスキルカードを並んべ、ブックにいれるべきものを吟味していたことを思わせた。

石のベットは最低ランクの家具のひとつだが、家具は街から持ち出せないはず。どうしても運びたい場合は馬車などの運搬系の道具が要る。そもそもまだ発明されていないし、出来ていたとしても野外では使えない。

「先天スキルですよ、先天スキル。『生ける城塞』っていうんです。まだありますけどクライさんもどうですか？」

アイテムボックスから取り出したカードを扇状に広げて見せた。全てが石のベッド。パーティひとつ分ある。

「いや、いい。しかし、どうこうスキルなんだ？」

「見ての通りですよ。家具アイテムを持ち運べるんです。熟練度が低いからは小さいものしか無理だし、持てる数も少ないんですけど便利ですね」

「ほう。なら、ベットではなく調理台は持っているか？」

それがあれば街でしか使えない料理スキルが使える。料理の質も効果もそちらの方が断然高いものになる。クライは 簡易調理 以外の料理スキルも持っていた。 簡易調理 の方も上位スキルの 簡易調理？ になり、焼き物だけでなく鍋物も扱えるようになっている。

しかし、ニアがぱつの悪い顔になつた。

「残念ながら」

「そうか。そういう特性のものならば真っ先に料理を思い浮かべると思ったが」

「ええ。まあ、えと、うん、高いですか。このベットは生産職のレベル上げのためにたくさん造られたみたいですが、使用する場面がないから安いんですよ。宿に行けばもっと高級なベットがありますし、借家はもとからついてます。家を買う方はまだいませんが、いたとしても石のベットをわざわざ適用するとは思えませんしね」「それはそうだろうな。まあ、簡単なものでいいから飯を作つくれ」

ミアがすずつと、上にかけていたマントに顔を隠した。

「いや、そこはクライさんが……」

「なんだ、料理系スキルがないのか？ 遠征では必須になるから早めに取つておいた方がいい。ないならば、俺のお下がりになるが簡易調理 のコモンスキルを譲りうる」

クライの仕事柄いつまで共に居られるかわからない。もし何かあればまたミアはひとりだ。

戦闘職ソロプレイヤーにとって食料は死活問題となる。生で食べられるものもあるが、多くは毒やダメージを受ける可能性を有する。簡易調理系スキルはそれほどキャパシティを必要としないし、持つていて損はない。

観念したよ<sup>ミア</sup>ミアが星々の輝く空を仰いだ。ここでは現実よりも星の光がよく届く。

「……できないんです」

「できない、とは料理のことか？」

「そうですよ。悪いですか？」

「悪くはないが料理のひとつくら<sup>ミア</sup>できた方がいいのは間違いないだろう」

「違います。呪いですよ。呪い！<sup>カース</sup> この先天スキルを活かそうにも呪いのせいでどんな料理も消し炭とか毒薬になるんです。だから、この世界に限り料理ができないんです！」

呪いは恵みと表裏一体。利点の裏側に寄り添つように欠点が存在する。<sup>カース</sup>ギフト

クライは何故、彼女が顔を真赤にして反論しているのか理解できなかつたが、気分を害しているのはわかつた。

料理には母性的なイメージが強い。年頃にもなればそれに対する意識も芽生えるものかもしけない。特に現実でも同様のコンプレックスでもありようのものなら。

「なんだ、それならそうと言えばいい。呪いならば誰も責めはしない」

そう言つてわつわと鍋を火にかけると、ヨロイアヒルの肉を野菜と一緒に入れて煮込んだ。これを調味料で味を整えてポトフもどきの完成だ。スキルのレベルがいくら高くても手順と数量を間違えばおいしいものは作ることはできない。

ニアも濃厚な鶏肉の匂いに惹かれてベットから這い出す。

「手際がいいですね」  
「味もいいと思うが」

軽い金属製のカップにスープを注がれ、パンと一緒に手渡された。一口飲むと野菜の爽やかな味が口いっぱいに広がった。

「おいしいですね」  
「だろう」  
「もしかして現実でも料理できるんですか？」  
「まあ、バイトでな」

クライは自身の行動、主にプレイヤースキルに疑問を持たれたときこう答えるようにしている。彼の数少ない経験ではこれで切り抜けられない場面はなかつたと思い込んでた。

「でも、こちらに来てからあんまり和食を食べてないんですね。  
こっちの世界には醤油はないんですか？」

「醤油？ なんだそれは」

「冗談はいいですから答えて下さい」

「知らんものは知らん」

どうしても人間と A.I.C の間には埋めがたい常識の差がある。この世界に存在しないものの知識を彼らは持たない。辞書も入っているが国語辞典のみならず、百科事典もインストールしておくべきだつただろう。

見た目はともかく喋り方は天然の日本人の同様に創られたのだから、醤油を知らないのはおかしい。

「クライさんって外国の人だつたんですか？」

「どうでもいいだろう、そんなこと。明日も早い。寝るぞ」

ある種の危機感を覚えた彼は無理矢理話を打ち切ると外套で体を包み、木にもたれた。

彼にとつては眠つてることは必要ない。ただふりをしているだけだ。ミアが寝付いてからも夜番を続けるだろうが、どうせ魔物は来ない場所である。

ミアは不服そうだつたが、クライが目を閉じるのを見届けると仕方なくベットに戻つていった。

世界の夜は今日も深く更けていく。

ゼロからトップスピードまでコンマ数秒で加速する。弾丸となつ

た黒鴉は高き空を蹴り、隕石の「」とく落ちてきた。

クライが見上げたのと直撃は同時だった。受身を取る間もなく、固い岩肌が剥き出しへなった地面を三度跳ね、地面の草を刈り取りながら転る。ニアはクライを追っていた目を飛んできた黒い物体に向けた。

「！」で会つたが百年目…あのときの恨みは忘れはせん…市中引き回しの上、さらし首にしてくれる…」

ゲームキャラクターのような、といつもある意味それそのものなのだが、忍び装束をまとつた女性が吠えた。

忍び装束とはいつても本物の忍者のようなものではない。半袖の上着に臙脂のホットパンツと黒のスパッツを今風にアレンジしてか、それとなく忍者っぽくしているだけだ。胸元に見える網状の鎖は帷子だろう。足にはその装備と体に似合わぬ金属の足甲をつけている。

それを着た彼女もまた戦国時代からやつてきたようだ。丁寧に切り揃えられた長い髪をまげのよつにまとめている。その体は野生動物を思わせる力強さと美しさを併せ持つている。

また面倒事に巻き込まれたと嘆息しながらニアが割つて入る。

「ちょっと落ち着いて下さい。どなたですか？」

「なんだ？ 底うのか」

「とりあえず訳は聞かないといけませんね」

「そうだな。俺も心当たりがない。なあ、二条二田円

クライはゆりひとつ立ち上がつた。

HPの減少はない。通常、プレイヤーへダメージを与えることは両者の合意がなければできない。待ち伏せや裏切りでの殺人は不可能というわけだ。

無差別にプレイヤーキルができるオンラインゲームは稀だらう。ストレスが大き過ぎる。そのため、専用のチャネルやフィールドを用意してある場合が多い。ただし、このゲームではまだ実装されていない。

「クライさん、どういう知り合いですか？」

「チュートリアルのパーティ戦で仲間として一緒に戦った者のひとりだ。だが、それきりだつたな」

ミカヅキと呼ばれた女性が人差し指を突きつけた。

「忘れたとは言わせない。そのチュートリアルのとき、貴様が私はスキルを使うときはその名を叫べ、と言つたことを……！ そのせいで私は丸三日 跰落とし や ウィンドスラッシュなどと奇声を上げながら魔物を斬り合つていたのだ！ 貴様にわかるか？ あの、冷たい氷のような視線が！ 見ちゃいけません、と子供を連れて行く母親の背中を見送るしかなかつた私の気持ちが！」

（……でも三日も気づかなかつた、と）

能動型ギフトでなければ発声する必要も理由もないのはニアだつて知つている。ゲームの中だから大目に見られるとは思つたが激しい戦いの最中では難しい。キャラクターに成りきつてのプレイ中ならしない人間はいないでもない。が、ログアウト不能の非常時にそんなことをしているのは少しばかり珍しかつた。

「それは俺じゃない」

「いいえ、諸悪の根源は貴様だ。あのとき頷いていなければ私はあんな恥ずかしい目に遭うこととはなかつたんだ。そして、三日後の彼からのチャットで謝罪があるまで……私は、私はっ！」

（しかも言われるまで気がつかなかつたなんて…）

ミカヅキの上段への飛び蹴りがクライを捉える。彼はそれを両の手で掴み、勢いを利用して逆方向へぶん投げた。  
空中でぐるりと影が舞い、金属の擦れる音を鳴らせて地面に降り立つ。

「ブシードーになるかと思つたが、シノビを選んだか」「私はもう正道の刀は捨てたのだ。手にするならば邪道の剣」

「どちらでも構わないが刀は背負わない方がいい。よく創作で背中に刀を背負つた忍者が出てくるがあれはだいたいフィクションだ。斜めに掛けていては転がつたときに体を痛める。音もつるさい。隱形には不向きだ」

キツとミカヅキが目を細めた。

「これはもう決闘しかないようだな」

背から刀を抜く。細く短い直刀だ。

「ほう、やはり忍刀か。が、目立つところに着けているのは褒められないな。その衣装もそうだが、人目を忍ぶ者があからさまにそれだとわかるものを持つてているのは自ら間者と言つていいようなものだ。そんなもの本来 シノビ が扮するような商人や農民には必要ない。リアル志向なら苦無を使うのを薦める。あれはもともと多目的工具だ。一般人が持つていても何らおかしいものではない。ああ、

ただし投げるな。よく小説や漫画で投げられるがんな形のものが  
まつすぐ飛ぶわけがない。このゲームではスキルさえあればなんと  
かなるらしいがな」「

もちろん全くこの世界では関係のないムダ知識である。シノビ  
だけではなく、シーフだって本来の仕事はこなさない。  
ふるふるとミカヅキの体が震え、顔が林檎のように真っ赤になっ  
た。こめかみにはこれでもかと血管が浮き出でている。いわゆるムカ  
つきマークというやツだ。

「どこまで私を虚偽にすれば気が済むのだ！今は現実のことは関  
係ない！」

「そうか、それは失礼した。戦国時代が好きだと聞いたのでこだわ  
りでもあるかと思つて助言したまでだが、どうも余計なお世話だつ  
たようだな」

ミアの目からは火に油を注いでいるようにしか見えない。しかし、  
これでもクライは本気だった。

この数日ですっかり慣れてしまつたミアにはそのことがわかつた  
が、ミカヅキは馬鹿にされたとしか考えられなかつた。

「とりあえず落ち着いて下さい、サンジヨウさん」

「そうだ。これから共に戦う仲間なのだからな」

冷静な低い声だった。ヴァレンチノが姿を現す。大きな白馬を二  
匹連れている。

クライたちカナンから一日と半日そこまで時間がかかっていた。  
そこまで長い時間がかかっているのは途中のダンジョンに潜つてい  
たからなのだが、それを含めてもこの馬さえあれば一分の一ほどに

に短縮できた。

もちろん、本来はそのように乗り物を使ってモロクの城まで行く。ただし、馬では山岳地帯は厳しいので力の強いペットが最良だっただろう。

「どういふことですか、ヴァレンチノさん？」

「彼らが私の言つた知り合いだよ。魔将モロクを倒す大事な戦友だ」

あじ髪をこすり、クライの肩に手を置いた。

「魔将？ モロク？ もしかしてここに着たのはボスモンスターの討伐ですか？」

ニアが首をかしげた。

「言つていなかつたのか、クライ」

「私は、行くぞ、としか言わせてませんよ。行き先は聞いていなかつたのでただの狩場の移動かと」

「そういえばそつだつたな」

「おいおい、ボスとの戦いとなれば死者が出るかもしれないのだ。そう簡単にことを進めてくれるな」

ボス、それも 魔将 の一柱であるモロクともなればその強さは他の魔物の比ではない。

かつては神にも数えられた牛頭の魔将は全魔物中でも最強の攻撃力比率を誇る。もしプレイヤーと同レベルのモロクがいたとすれば筋力値に極振りでも攻撃力はその百五十%を有に超えるだろう。

「いえ、そろそろ強敵と戦つてみたいと思つていましたので」

ミアは臆しない。というよりも、投げ槍だ。

所詮ゲームだとしか考えていないから、現実でも仮想でも生に對する執着心が希薄過ぎるから彼女はいがに入った栗みたいな人間としてロールプレイできる。

「それよりも、です。私はそこの男が参加するなんて聞いていませんよ！」

ミカヅキは大袈裟に腕を広げた。

「クライを知つていてるということはその実力も知つていてるはずだ。クライよりいい ウオリアー を知つていてるか？」

言葉に詰まる。

もともと彼女の交友範囲は狭い。それを抜きにしてもクライより優れたプレイヤースキルを持つ ウオリアー はまだ育つていない。レベルを考慮しても全く情報を持たずに始めなければならなかつた他のプレイヤーたちからは頭ひとつ抜きん出でている。

「知りませんが……」

「ここから先はチーム戦だ。よろしく頼む」

クライが差し出した手を彼女は湿った目で見下ろす。

「この人はいつもこんな感じです。ちょっと何考えてるかわかりにくいですが、悪い人ではないですよ」

「貴方も大変だな……。仕方ない、この娘に免じてここは目を瞑ろう」

ミカヅキはしづしづその手を握った。

歩くとき、がちやがちやと足甲の金具がなつた。忍者つてこんな  
だつたかな、ヒヒアもクライと同じよつた感想を抱いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8801y/>

---

Ampere Blood

2011年12月29日21時45分発行